

事例7： 高等学校 チーム支援を行ったGさん（1年生）

アスペルガー症候群の診断を受けており、主に対人関係において課題のある生徒に対して、個別の教育支援計画を作成、活用した事例です。小グループでの話合いや特別支援学校のセンター的機能等を活用し、校内での対象生徒の理解を深め、保護者に対して丁寧に対応することで信頼関係を築き、個別の教育支援計画の作成、活用につなげました。

<生徒の実態>

- 高校1年生男子で、小学校のときにアスペルガー症候群の診断を受けています。
- 物おじすることなく自分の考えや意見を述べるができます。
- パソコンの操作や絵を描くことが好きで、自分が興味を持ったことをインターネットや書籍で情報収集しています。
- 興味に偏りがあり、授業の取組は教科間で差が見られます。
- 授業のスピードや課題の処理等についていけず、学年相応の学力定着が難しい状況があります。
- 自分のできないことや失敗を同級生に指摘されると過敏に反応し、手が出てしまったり相手を非難する言葉を言ったりすることがあります。
- 見通しが持てないとストレスを感じ、体調を崩してしまうことがあります。



1. 個別の教育支援計画作成までの経緯

情報収集・実態把握

☆ **合格発表後**、引き継ぎの依頼のあった中学校にコーディネーターが向向き話を聴きました。



- 引き継ぎについて、本人、保護者の了解が得られたということで、中学校から依頼があり、コーディネーターが向向き話を聴きました。Gさんは、アスペルガー症候群の診断を受けており、中学校では、個別の指導計画を作成して支援をしていましたので、その引き継ぎを受け、Gさんが苦手なことや興味を持っていること、実際に行われていた具体的な支援等について確認しました。
- コーディネーターは、中学校から得た情報を、入学前に担任やGさんの授業担当者に伝えました。



プチ情報：情報収集の方法としては、合格発表後に、引継ぎの必要な生徒の有無について FAX や文書等で中学校に問い合わせを行い、「必要である」と回答があった学校に訪問している高校もあります。

校内支援体制作り①

☆ 高校で支援を行っていくためには、**チームで支援**することが大切であることを共通理解し、特別支援教育校内委員会に加えて、小グループによる情報交換、情報共有の場を設定しました。

- コーディネーターは、Gさんの支援について、相談課長、学年主任、養護教諭に相談しました。
- チームで支援することが大切であることや、そのために、小グループでの話合いの場が必要であることが話し合われました。
- 具体的な話合いの場として、必要に応じて①コーディネーター相談課長、担任（副担任）、部活動顧問が集まり話合いを持つこと（基本は月1回）、②教科会を持ち、授業担当者が集まり、実態把握と支援の手立ての共通認識を持つこと（基本は学期1回）が決められました。
- 話合いでは、Gさんがイライラしたり精神的に不安定になったりしたときに、気持ちを落ち着ける（クールダウン）ための部屋を設ける、個別の教育支援計画を作成する、などの具体的な手立てが出され、その内容を校内委員会で提案しました。
- 校内委員会では、小グループでの話合いを受け、カウンセラー室をクールダウンの部屋に使用することが正式に決定され、全教職員に周知されることとなりました。



校内支援体制作り②

☆ 小グループで、**校内の教職員の理解・啓発**が重要であることが話し合わせ、特別支援教育についての研修会を企画したり特別支援教育だよりを発行したりしました。

○ 校内研修会を年間4回計画しました。研修会の講師は、特別支援学校のセンター的機能と、総合教育センターのカリキュラムサポート（出前講座）を活用しました。

第1回	特別な教育的ニーズのある生徒の理解と支援
第2回	特別な支援を必要とする生徒の実態把握
第3回	WISC-Ⅲ知能検査の概要、結果の見方 特性に応じた指導支援
第4回	個別の教育支援計画と個別の指導計画

○ 「特別支援教育だより」を毎月発行し、職員会議中にそれを使ったプチ研修会（10分程度）を行うことで教職員の理解啓発に努めました。

○ Gさんの支援のみならず、他の生徒の実態や支援についての話が普段の会話の中に出るようになり、教職員の意識が高まってきました。



保護者全体への理解・啓発

☆ 「特別支援教育」に関するリーフレットを配付したり、PTA総会等を活用し、特別支援教育についての話をしたりして、**保護者の理解・啓発**に努めました。

○ 入学式後のオリエンテーションで愛媛県教育委員会作成のリーフレット「高等学校中等教育学校における特別支援教育」を全保護者に配付しました。また、コーディネーターから、「本校における特別支援教育」というテーマで話を行い、個別の教育支援計画や個別の指導計画についても触れました。

○ PTA総会では、相談課長から教育相談について説明する中で特別支援教育についても触れ、「困ったこと」「不安なこと」があれば、気軽に声を掛けてほしいと呼び掛けました。その際、コーディネーターや教育相談担当者の名前や写真連絡先の入ったパンフレットを配付しました。



Gさんの保護者との信頼関係の構築

☆ コーディネーターは、Gさんの担任と話し合い、保護者と情報交換を密にしていくことを共通理解しました。

☆ 担任が保護者に学校でのGさん様子や支援内容を伝えたり、家庭で困っていることへの対応を一緒に考えたりすることで、**信頼関係**を築いていきました。

☆ 懇談時にコーディネーターが同席して個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成の意義について説明を行い、保護者の同意を得ることができました。

○ 担任は、Gさんの学校での様子について保護者とできるだけ情報交換（電話、メールで）するようになりました。

学校から

Gさんの頑張っていることや良い点を伝え、課題となる点について伝え、同時に現在行っている支援内容や成果についても伝えるようになりました。



家庭でのGさんの様子について話があり、困っていることについての相談がありました。

家庭で困っていることへの対応を一緒に考えたり、その場で答えられない内容については、毎週行われる小グループでの話し合いで、支援について話し合い、アドバイスするようになりました。



保護者から

○ 情報交換を継続して行っていくうちに、保護者の方から担任に相談の連絡が入るようになり、その都度丁寧に対応していきました。

○ 保護者との信頼関係が築けてきたと感じたコーディネーターは、個別の教育支援計画を作成する準備に取り掛かりました。

○ 1学期末の懇談時にコーディネーターから、個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成のメリットを丁寧に説明しました。保護者はこれまでの学校の取組に感謝しており、その場で作成することの同意を得ました。保護者からは、今現在関わりのある関係者・関係機関について教えてもらい、学校から関係者・関係機関と連絡を取ることに同意も得ることができました。

2. 個別の教育支援計画の作成

個別の教育支援計画（案）の作成

☆ 本人と保護者の願い等を把握したり、**関係者・関係機関を確認**したりした上で、関係者・関係機関より情報収集を行いました。

☆ 担任とコーディネーターは、**保護者と話し合い**、個別の教育支援計画（案）を作成し、**校内委員会**で、検討しました。

1 Gさんと保護者の願いと希望を把握しました。



Gさん

〇〇大学に入学したいです。



保護者

無事進級し、友達を作ってほしいです。

2 コーディネーターは、保護者と個別の教育支援計画の作成に参画する関係者・関係機関について確認しました。

Gさんの場合は、医療機関、相談機関、塾講師でした。

3 担任とコーディネーターが各関係者・関係機関と直接連絡を取ったり、保護者に連絡を取ってもらい、保護者から話を聞いたりすることで情報収集をしました。

4 担任とコーディネーターが保護者と話し合い、個別の教育支援計画（案）を作成しました。

特別支援学校のセンター的機能を活用し、作成についてアドバイスをしてもらいました。

様式は、愛媛県教育委員会から出されているものを基に、書きやすい様式に変更しました。

5 校内委員会で個別の教育支援計画（案）について検討し、支援会議に提案しました。

支援会議の開催

☆ 支援会議では、関係者・関係機関から支援の状況を報告してもらい、個別の教育支援計画（案）を基に目標等について話し合い、**個別の教育支援計画を作成**しました。

☆ 今回の支援会議において支援に関する**評価を行うことを確認**しました。

- 支援会議では、最初にコーディネーターが個別の教育支援計画の趣旨を説明しました。
- 関係者・関係機関から支援の状況を報告してもらいました。
- 個別の教育支援計画（案）を基に、目標や支援内容を話し合い、学校、家庭、関係者・関係機関で支援の役割分担をしました。
- 次回の支援会議の開催時期（新年度初め）とそのときに関係者・関係機関で行った支援に関する評価を行うことを確認しました。
- 個人情報の取扱いについて確認しました。

<支援会議の参加者>

- ・校内関係者（管理職、生徒課長、相談課長、養護教諭、学年主任、担任、副担任、部活動顧問、コーディネーター）
- ・保護者
- ・相談機関関係者
- ・塾講師

<目標>

- ①学校生活や家庭生活に見通しを持ち、落ち着いて過ごす。
- ②自分の状態・困難さを説明し、どうしたいのか、どうしてほしいのかが説明できる。
- ③自らの行動に責任が伴うことを自覚し、自信を付け、自己肯定観を高める。

支援会議の開催後

☆ 個別の教育支援計画の**保管方法について確認**し、関係者・関係機関に**写しを送付**しました。

- 支援会議において作成された個別の教育支援計画は、学校が原本を保管し、各関係者が写しを保管するようにしました。
- 支援会議に参加できなかった関係者・関係機関にはコーディネーターが写しを送付し、個人情報の取扱いについて再度確認しました。

支援会議を行い、個別の教育支援計画を作成することにより、Gさんに関わっている関係者・関係機関を確認することができ、具体的な支援についての共通理解を図ることができました。

3. 個別の教育支援計画の活用

個別の指導計画の作成

☆ 個別の教育支援計画を受けて、学校では、**個別の指導計画**を作成し、支援を行うこととなりました。

- 担任、コーディネーターが中心となり、保護者の意向を踏まえ、個別の指導計画（案）を作成しました。
- 校内委員会で、目標や支援内容等が話し合わせ、個別の指導計画を作成しました。
- 個別の指導計画は、教科会において周知され各先生方が個別の指導計画を基に支援を行うこととなりました。

<校内での支援の手立て>

- ①課題やテストのための見直しを持った計画を自分で立てることができるよう、細かなスケジュールを教師と一緒に立てる。
- ②ストレスを感じたときはクールダウンの部屋に移動し、落ち着いたら帰って来るように支援する。
- ③自分はどうしたいのか、そのために、どうしてほしいのか言えるよう、特に自分のストレスに対して敏感に反応できるよう表情カードを利用する。
- ④得意なことやうまく行ったことに着目させることにより、意欲を高める。



留意点：各目標が対応したものになるようにしよう！

個別の教育支援計画の目標

個別の指導計画の長期目標

個別の指導計画の短期目標

評価

☆ 個別の指導計画については、各学期末に**評価**し、**見直し**を行いました。

☆ 個別の教育支援計画については、年度末に**評価**を行い、校内委員会で**見直し**を行いました。



- 個別の指導計画は、各学期末に各教科担当者、担任、コーディネーター、保護者で評価を行い、その都度、目標や支援の手立ての見直しを行いました。
- 年度末には個別の指導計画の評価を基に、コーディネーター、相談課長、担任（副担任）、部活動顧問参加の小グループのメンバーで、個別の教育支援計画の評価を行いました。その評価を受けて、校内委員会で個別の教育支援計画の見直しが行われました。
- コーディネーターは、各関係者・関係機関にも年度末に評価を依頼しました。それをまとめたものを、次年度始めの支援会議に提出することにしました。
- 支援会議は年に1回（1学期）持つこととし、必要に応じて随時開催することとしました。

個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、支援した結果、Gさんは、授業中いらいらした気持ちになったときは、自分から教師に申し出て、カウンセラー室に行くようになりました。そして、気持ちが落ち着いたら教室に戻ってくことで、落ち着いて授業や活動に参加できるようになってきています。今後も計画や支援方法を見直し、保護者や関係者・関係機関と連携して、Gさんを支援していきたいと思っています。



「個別の教育支援計画の作成のポイント！」

本人の願い
保護者の願い

と

目標

と

支援

のつながりを

スタートです！